

和田繁二郎先生追悼

真 下 厚

学部三回生に編入した私が先生のご講義を受講したのは大学院の博士課程に進学してからのことである。一回生時は「特別研究」のご講義であった。これは、『解釈と鑑賞』臨時増刊号をテキスト

トとして、欧米におけるさまざまな文芸批評の方法を日本文学に適用する試みとして行われた。硬直した頭がいくらかやわらぎつつあった私にとって、こうした広い視野のご講義は大きな刺激であった。そして、先生はこうした広い視野のご講義は大きな刺激で表現において実証することの大切さをとりわけ強調されたことであつた。

修士論文をもとに書いた初めての論文が本誌に掲載されたときのことである。そのころ、白川静先生が『万葉集』について執筆しておられ、和田先生は拙稿のことをお話くださったとのこと、衣笠キャンパスに移転したばかりの先生の研究室で白川先生とお会いしたことであつた。『万葉集』についての私の拙い論は実は白川先生の中公新書『詩経』の影響を強く受けて立論したものであり、直接お目にかかつて『万葉集』についてお話を伺えるのは大変な感激であつた。白川先生はその後上梓なさつた『初期万葉論』のなかで拙稿のことをご紹介くださった。拙稿は愚考を

したためたものではあつたが、白川先生のご著書のなかでのご紹介はおずおずと歩き始めた私にとって何よりも励みとなるものであつた。その仲立ちをしてくださつたのが和田先生である。

こうした先生のあたたかい指導は本学の卒業生をあまねく育てようとなさる思いからのものであつたろう。先生は昭和十三年に本学の専門学部文学科国語漢文科に入学され、十六年三月に卒業された後、同年四月に法文学部国文学科に入学、十八年九月卒業、さらに十九年四月に研究科国文学科に入学、翌二十年三月に修了された。その間本学の第一中学校教諭を務められ、二十一年四月には大学予科教授、二十四年四月には専門学校教授、二十五年二月には文学部助教授を兼務され、三十一年四月からは教授を務められた。戦中・戦後の激動期の時期である。学科・専攻の存亡の時期をこうして支えてこられた。そして、二十九年六月の水泰先生の還暦祝賀を契機として結成された本学会創設に当たつてはその中心となつて尽力され、それ以後長年にわたつて本学会を指導してこられたのである。

私が先生のご自宅に伺わせていただくようになったのは本学会の総務を担当するようになってからのことである。学会創立四十

周年記念大会を開催することとなり、和田先生には「小泉冬三先生の人と学問」と題してご講演をいただいたことであつた。その内容は本誌第六十一号に十四ページにわたつて掲載されているが、その原稿をお願いしたとき、歌誌『ポトナム』の編集をなさつておられることでもあつたのだから、本誌が一段何字組みかをお尋ねになり、それに合わせた形式の原稿を頂戴したことであつた。会誌編集への細やかなお心遣いである。その先生の柔和なお顔が今も思い起こされる。

本学会はその精神的な支柱であつた先生を失つた。日本文学の研究・教育について問われている今、先生がお元気で見守つていただくなら、と強く思う。しかし、今は先生のそのようなお心を思いつつ、今後に進んでゆかねばなるまい。

(ましも・あつし 本学教授)